

開催報告

さーもん・かふえ 2019
公開市民講座

2019
6/14・15

ふるさとのサケ -Finding our salmon-



「何でもはなすべえ」のーコマ。ふ化場関係者が演者と直接議論する時間は熱気溢れている。

6月14日から15日にかけて、岩手県盛岡市のエスポワールいわてに於いて、今年で8回目となる「さーもん・かふえ 2019」が開催されました。震災の翌年、津波で甚大な被害を受けた岩手県サケ増殖事業の復旧・復興の後押しを目指して始まったこの取り組みは、漁業やふ化放流技術に関する情報提供、現場の技術者と研究者の交流を目的とした座談会「何でもはなすべえ」などを実施し、ほぼ毎回、ふ化場および行政関係者を中心に**100名以上**の参加者を集める東北マリンサイエンス拠点形成事業屈指のイベントとなっています。さらに、2016年以降は「**震災復興の先**」を見据えて、漁業・ふ化場関係者のみならず、広く一般市民を巻き込むための運営が行われています。今回も昨年同様の2部構成で、初日は主にふ化場関係者向けの専門的な話題に特化した「技術部会」、翌日は一般市民を対象とした「一般公開講座」として開催されました。

技術部会ではまず、北海道、青森、岩手、宮城の試験研究機関の専門家による**最新のふ化放流技術等**に関する講演がありました。異色なところでは、北里大学医学部の西楨俊之先生による「サケ稚魚の全身組織切片からのバーチャルスライド化 -魚類防疫への活用に向けて-」が注目されていました。続いて、さーもん・かふえの真骨頂「**何でもはなすべえ**」。質問したいけど、大勢の前で手を上げるのはちょっと……。そんな職人堅気のふ化場関係者に、この機会をフル活用してもらいたいと運営サイドがひねり出した妙案です。発表スライドをまとめたポスターとともに演者が会場各所に散らばり、参加者と**膝をつき合わせて**議論することができます。たっぷり2時間近くが割当てられていましたが、熱い議論に時間も酸素も明らかに不足していました。



2019年の開催告知

さて、「ふるさとのサケ -Finding our salmon-」と題された翌日の一般公開講座では、全球から各県まで様々なスケールで「ふるさとのサケ」を考える講演の後、これまで漁業一辺倒だったサケの**文化的、教育的、観光資源としての価値**を見直す様々な動き・取り組みが紹介されました。東北マリンサイエンス拠点形成事業による研究成果は、近年のサケ資源の減少が単なる震災の影響ではないことを示しています。あの日から8年。そろそろ震災復興だけでなく、**50年後 100年後**を視野に三陸のサケについて考える時にきているのではないのでしょうか。
(青山 潤 国際沿岸海洋研究センター 教授)

2019年は
国際サーモン年
です!





海と希望の学校・盛岡分校だより

「海と希望の学校・盛岡分校」を紹介します！

東大の大気海洋研究所と社会科学研究所がタッグを組んだ文理融合プロジェクト「海と希望の学校 in 三陸*」。盛岡に分校があるをご存知ですか？「校舎があるの？」と思った方、いえいえ、校舎はそこかしこに。どこへでも展開する移動型学校です。2019年夏は、岩手県立図書館で海に関する本とともに大槌の沿岸センターを紹介するパネル展示や、盛岡市立動物公園でセンター所蔵のオサガメとアカウミガメの剥製を展示するなど、多くの方々のお力をいただきながら活動しています。

中でも盛岡市在住の大竹喜彦さん・静枝さんご夫妻は、分校立ち上げの火付け役でもあり、中心となって活動を進めてくださっています。今回はお二人に開校から現在までのお話をうかがいました。

たくさんのご縁あって開校した
盛岡分校

静枝さんは沿岸センターの青山潤教授と旧知の仲。今から約30年前、互いに青年海外協力隊員を経験しており、出発前の訓練中にスペイン語グループで共に学んだ間柄とのこと。以後、再会するまでには20年近い月日が流れましたが、大竹家が盛岡市へ移住し、青山教授が大槌町のセンターに着任したことから、交流が復活したといえます。

静枝さんは野生動物の研究者であり、仙台ECO動物海洋専門学校の講師。喜彦さんは豊かな里山に囲まれた特別養護老人ホームなのりの杜の事務長。今回の分校立ち上げは、恩師の紹介で関わった盛岡市の教会・善隣館の茶話会に青山教授を招いたことがきっかけでした。その後もセンターの研究者を招くうちに「海と希望の学校 in 三陸」の活動を応援したい「盛岡でも何かできるのでは？」と話が展開したのが始まりです。プロジェクト名は「盛岡分校」がピッタリだと決めました。



岩手県立図書館に展示していただいた沿岸センターの紹介パネル

盛岡でやる意味？

…だって、おもしろいじゃない！

「沿岸部の研究を盛岡で紹介し、分校を開こうと思ったのはなぜ？」の問いに、こう答えた静枝さん。「大槌のセンターの存在は、あまり盛岡では知られていません。海を対象にしたフィールドワークや、先端的な研究手法など、ワクワクするお話を伺い、これを盛岡で紹介しない手はない！と思いました。三陸の魅力が伝われば、盛岡の良さを見直すきっかけにもなるはず」。分校の活動を進める理由は「おもしろいから」に尽きる、という静枝さんの言葉に、私たちも背中を押されています。

海と森の学習交流で育つ・
岩手アイデンティティ

盛岡分校では今後、三陸本校の成果を盛岡の学校などで発表するほか、大槌での体験学習や、サケをテーマにした活動なども展開する予定です。サケは三陸沿岸域と内陸の山間部に共通し、民俗学や生態学的に様々なことが学べる魚です。地域ごとのサケ料理を作って学ぶイベントなども企画中。

盛岡近隣の皆さん、沿岸部の皆さん、このユニークな活動にぜひ参加しませんか？



盛岡市動物公園のウミガメ展示コーナーにて。
盛岡分校の仕掛け人・大竹喜彦さん静枝さんご夫妻

盛岡分校が目指すこと

- ・本校の活動をサポートする
- ・三陸との関わりを意識しながら、盛岡のローカル・アイデンティティに関わる独自の活動を実施する
- ・岩手の素晴らしさ（海と森、沿岸部と内陸部など）を広め、次世代の「希望」を育む

今後の予定（下記の会場は岩手県立図書館）

- 10月19日（土）：小学生向け講演会
「絶滅危惧種 ウミガメのなぞを追え！」
（講師：福岡拓也）
- 海を知る連続講座 鮭から見えるいわての海
11月9日：「岩手に帰るサケの生態～北上川を中心に」
（講師：北川貞士）
- 12月7日：「三陸沿岸地域で獲られたサケの行方」
（講師：吉村健司）
- そのほか、トークイベントなど企画中

*「海と希望の学校 in 三陸」
岩手県大槌町にある東京大学大気海洋研究所 国際沿岸海洋研究センターと、釜石市に拠点を置く社会科学研究所による地域連携プロジェクト。海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域に希望を育む人材を育成するという文理融合型の試みです。